

I サムエル 20 章「主が永遠の証人」

人は親子、夫婦、友人などの親しい人間関係の中で守られて、生きることができます。けれども、人は皆罪人なので、人間関係において問題を抱えることもあります。また、苦難を経験するとき、人間関係の真価が問われることとなります。そのような私たちの人間関係にも主による助けと祝福が与えられていきます。ヨナタンとダビデが主に誓って、契約を結び、相手を自分自身のように愛し、契約に基づいて真実を尽くした態度から私たちのあり方を教えられます。

1. ダビデの要請（：1～11）

ダビデはヨナタンのもとに行き、助けを求めます。「何をし、どんな咎があり、どんな罪があるというのですか」と問いを3回繰り返しています。ダビデにはサウルにいのちを狙われる理由が全く思い当たりません。

これを聞いてヨナタンは驚きました。2 節のように言っていますが、ヨナタンはサウルがダビデをとらえ殺そうとしていることを知らなかったようです。それらの出来事の前に、ダビデを弁護して父サウルを説得し、「主は生きておられる。あれは殺されることはない」と父が誓ったことを信頼していたのです。

ダビデはなおも訴えます。ヨナタンの父への信頼を傷つけることがないようにして、自分の今の状況を伝えます。「私と死の間には、ほんの一步の隔たりしかありません」とは誇張ではなく、事実です。

ここでヨナタンはどうするでしょうか。父サウルに信頼して従っています。けれども、友ダビデが父にいのちを狙われていると切実に訴えています。その時に、ヨナタンはダビデのことばだけから父に怒りを燃やすことはしません。また、身内に対してひいきすることもしません。自分はまだ状況を正確に把握していないと冷静に、謙虚になっています。「あなたの言われることは、何でもあなたのためにします」と言って、ダビデの話聞き、そして父の心を知るために行動しようとしています。

そこでダビデは、サウルの心を知るための一つの方法を提案します。次の日がちょうど新月祭の日でした。新月祭には家族が集まり、いけにえを献げて主を礼拝し、食事を共にすることになっていました。しかし、ダビデは三日目の夕方、祭が終わるまで野に隠れていることにします。そして、欠席の理由をサウルが尋ねたら、ダビデがベツレヘムの自分の家族のところにいきたいと頼んだと答えるようにします。それに対するサウルの応答によってその心の思いが分かるということです。もし、サウルにダビデに対する怒りや殺意がなければ、欠席の理由を受け入れるでしょう。ダビデが実家に行くことに何の問題もないでしょう。しかしもし、サウルが激しく怒るなら、ダビデに対する疑いを持っており、怒りと殺意が心にあることが分かります。

このような提案をして、ダビデはヨナタンにサウルの心を知って欲しいと願っています。8 節。「真実」と訳されていることばはヘブル語のヘセドということばです。主がイスラエルと契約を結んでご自身の民とし、契約に基づいて誠実を尽くして民を愛してくださることを表したことがヘセドです。その主を信頼し、主を間にして、二人は契約を結びました。主の誠実な愛に基づいて、互いに真実を尽くすことを誓いました。その誓いを果たしてくださいとダビデはヨナタンに求めています。

ヨナタンはまだ、サウルがダビデに害を加える決心をしているとは思っていないようです。しかしダビデは、サウルが厳しい返事をしたときに誰が知らせてくれるのかを慎重に考えています。その様子から、ヨナタンは「野に出ましょう」と提案します。ダビデの要請と父の状態について真剣に考える必要を感じたのでしょう。

2. ヨナタンの誠実（：12～23）

場所を変えて、改めてヨナタンはダビデに答えます。父サウルがダビデに対して寛大であるかどうかを探り、寛大でなければ必ずダビデに知らせると誓います。

13 節の「主が父とともにおられたように、あなたとともにおられますように」ということばは祝福を祈る定型句です。しかし、「主が父とともにおられた」と過去形にしていることから、ヨナタンは主がサウルから離れたことを感じとっていたのではないかと思います。

そしてヨナタンは、サウルがダビデに敵対するなら、王であり父であるサウルに逆らっても、ダビデを無事に逃すと誓います。ヨナタンは主がダビデとともにおられ、ダビデが次の王になるのだらうと考えるようになっているのでしょう。それで言います。14 節。ダビデが次の王になるなら、ヨナタンは自分が死ななければならぬとしても受け入れるつもりです。前の王の一族が次の王によって滅ぼされることはよくあることです。主の恵みを自分に施す必要はないと言います。

しかし、「あなたの恵みを私の家からとこしえに断たないでください」と求めています。「私の家」つまり自分の子孫に恵みを施して欲しいと願っています。ヨナタンが語っている「主の恵み」「あなたの恵み」もヘセドということばです。自分の子孫に恵みを施してほしい、契約に基づく誠実な愛を尽くして欲しいと求めます。こうしてヨナタンとダビデは改めて契約を結びます。それぞれの子孫にも及ぶ契約を結びます。

その上で、ヨナタンは父サウルの心を探った結果をダビデに知らせる方法を告げます。ダビデが隠れている場所の近くでヨナタンが3本の矢を放ち、子どもにそれを取りに行かせます。その時に、「矢はおまえのこちら側にある」と言えばダビデは安全であり、「矢はおまえの向こう側だ」と言えば逃げてくださいという合図です。

このような方法で必ず知らせるとヨナタンは約束します。23節。主が二人の間に行きかかると信頼して、主の前で話し合い、約束しているということに目が留まります。それぞれ自分の見方を絶対としてはいません。すべてを知っておられる主に委ねることが信仰者にとって大切であることを教えられます。二人は主の前で誓い、主を永遠の証人として互いの信頼と愛を保ち、また成長させたのでした。

このような主にある関係、つまりそれぞれが主を信頼して歩むこと、そして主を間にして約束したことを守ることは、私たちの友人関係にも大切です。また、夫婦関係、親子関係などにおいても大切なことです。

3. 新月祭での出来事（：24～42）

こうしてダビデとヨナタンは話し合った通りに行動します。新月祭になり、サウル王は食事の席に着きます。ダビデは新月祭の一日目、二日目とも欠席です。サウルはそのことをヨナタンに尋ねます。名前では呼ばず、「エッサイの子」と言っているのは軽蔑を含んでいるのでしょうか。ヨナタンはダビデと打ち合わせた通りに答えました。すると、サウルは怒りだします。30～31節。サウルの怒りはヨナタンに向けられます。怒りに任せて、ヨナタンを侮辱するようなことばを浴びせます。ダビデに肩入れすることで、自分と家族に不名誉や辱めをもたらしていると責めます。サウルは息子ヨナタンに王位を継承させようとしていることが分かります。ダビデがいたらそれが難しいと分かっています。それなのに、当のヨナタンがダビデの肩を持っているので、激しく怒ります。

ヨナタンは傷ついたでしょう。これまでの父に対する信頼が崩れ去るような感じでしょう。ヨナタンは抗議して言います。「なぜ、彼は殺されなければならないのですか。何をしたというのですか」。するとサウルは怒りを抑えきれず、槍をヨナタンに投げつけました。ダビデの証言通りに父の殺意を確認することになりました。でも、ヨナタンはサウルに対して怒ったり、自分の受けた仕打ちを嘆いたりするのではなく、「父がダビデを侮辱したので、ダビデのために悲しんだ」のです。

朝になると、ヨナタンは子どもを連れて、ダビデが待っている野に出て行きます。そして、子どもが取りに行く間に、子どもの向こうに矢を放ちます。37～38節。サウルがダビデを殺そうと決心していることをヨナタンは伝えます。「早く。急げ」と緊急性があることを伝えます。子どもにはその隠された意味は分かりませんが、ダビデには伝わりました。

ヨナタンは子どもを町に帰しました。ダビデと顔を合わせて、別れの時を持ちたかったのでしょうか。子どもが行って、ヨナタンだけになると、ダビデは出て来て、二人は抱き合っただけ泣きました。これから先、どうなるのか分かりません。もう会えないかもしれません。しかし、二人は主の前で結んだ契約を守って、誠実に歩むと決意しています。42節。

ヨナタンは「安心して行ってください」と言いました。別れの挨拶ですが、ここでは単なる挨拶ではありません。お互いに相手の平和を守ることを主の御前で誓っています。そうして二人は別れました。

ヨナタンはどちらの味方というより、主の前での誓いを守り、父サウルの罪深い思いに逆らって、ダビデに真実を尽くす信仰の選択をしました。ヨナタンとダビデの間には、主がお立ちくださることのみこころが表されていく友情がありました。主を永遠の証人とする二人の契約の恵みは、確かに子孫へと受け継がれていきます。

主にある兄弟姉妹の間にも主が立ってくださいます。私たちも友人関係において、あるいは夫婦関係、親子関係においても、主を永遠の証人として契約を結ぶような関係を持つことができます。それぞれが主の御前に歩み、主の前で誓ったことを守っていくなら、主のみこころにかなった、主に喜ばれる人間関係を持つことができます。

私たちも主が間に立ってくださいる関係を持つことができるように、互いに主の御前に誠実に歩むことができるように、主の誠実な愛に基づいて互いに真実を尽くすことができるように、祈り、意識していきましょう。